

ニザーム・アルムルク『統治の書』（井谷鋼造・稲葉穠訳）岩波書店 2015年 xvi+388+10頁

本訳書は、セルジューク朝の第二代のアルプ・アルスラーン以来、政界に影響力をもち、特に、第三代マリクシャーの名宰相として仕えたニザーム・アルムルク（本訳書の書記法による）が「1087年から1092年の間に執筆したとされる」（本訳書357頁。以下はページ数のみを記す）ペルシア語による著作『諸王の行状』*Siyar al-mulūk*の全訳である。本訳書は京都大学文学部西南アジア史学研究室を中心に継続されてきた原典資料会読を通じての長年に亘る研究と翻訳作業の集約といえる成果であり、今回、「イスラーム地域研究プログラム」の成果の一部としてまとめられたものが公刊される運びとなったという。ペルシア文学史上、古来その重要性が指摘されてきた本書の日本語の学術的全訳が公刊されることの意義は極めて大きく、本訳書の登場が、歴史、文学、宗教の分野を問わず、我が国におけるペルシア語テキスト研究の水準を向上させる上で大いなる力となることは疑いないところであり、学問史的にも大きな貢献といえる。

ニザーム・アルムルクが果たした役割、その歴史的意義については、本訳書の解説の部分に専門的な研究者からする解説が付されており、この大宰相の暗殺の首謀者に関する事実関係も含めて、現在における学術的な意味でのニザーム・アルムルク関連の最新の情報が紹介されている。本訳書末の、本文の内容に係わる詳細な注は、当時の輻輳する政治・社会状況をこの訳文から読み解く上での有効な補完情報を提供している。

訳文は全編を通して平明でわかりやすく、原典に散見される判読不能な地名などについても校訂テキストの内容に関する歴史・地理考証が、適宜、翻訳に反映させており（例えば、本訳書183頁9節——ジャースト、パミール、クミージュ、など）、こうした点は本訳書の学術的価値を高めている。

評者の専門はペルシア文学であり、歴史学的観点からする本訳書の正確な位置づけと評価はもとよりその任ではないので、ここでは、まず、本書自体に係わる学問史的課題にふれ、その後、主として、ペルシア語テキストの読解と日本語訳との関係などに関連して、幾つかの点を指摘することとする。

以下、「本書」はニザーム・アルムルク著のペルシア語原典を、「本訳書」は今回公刊された日本語全訳書を指す。

本書の書名(題名)について

従来から本書に関わる問題として話題になってきたのが本書の書名に関するものであろう。ダークの写本考証によって *Siyar al-mulūk* の書名の提示がなされるまで、シェフェル以来、本書を『政治の書』、『統治の書』*Siyāsatnāma* と呼ぶことが慣習化している向きがあった。例えば、古典期のペルシア語テキストの語法の研究で定評ある *La langue des plus anciens monuments de la prose persane* (Gilbert Lazard, 1963, 113–116.) も *Siyar al-mulūk* と併記しつつ *Siyāsatnāma* という題名自体を挙げている。こうした状況は文学の分野でも同様といえる。一方で、本書には一箇所だけ、ニザーム・アルムルク自身が自著を「この(諸王の)行状の書 *in kitāb-i siyar*」と呼んでいる箇所があること(本書255頁、本訳書43章4節の冒頭。本訳書では「この書物」となっている)からも明らかな通り、本書は本来「諸王の行状」と題する、ササーン朝以来の帝王学の伝統の延長線上にある著作として考えられ、ズィヤール朝のカイ・カーウースの『カーブースの書 *Qābūs-nāma*』やアブー・ハーミド・ガザーリーの『諸王への忠言 *Naṣīḥat al-mulūk*』の系列に属する著作であるといえる。ニザーム・アルムルクの暗殺からほぼ二百年後に没した文人サアディーによるペルシア語散文の規範ともされる『薔薇園 *Gulistān*』の第一章「王者の行状」にも、こうした「王者の行状」の系統の文学的側面を読み取ることができる。

他方、*Siyāsat* という言葉はニザーム・アルムルクの時代は「懲罰・掣肘」という意味で用いられることが多く、現に、本書においても *Siyāsat* は「懲罰」という意味でしか用いられていない(例えば、本訳書の7章9節、4章の21節、26節など)。この点からすれば、もし本書が *Siyāsatnāma* という書名であるとなると、当時であれば「懲罰法規集」のような意味をもった可能性がある。

本訳書においても、慣習としての『統治の書』を本訳書の正式の書名としながら、翻訳文の本文は、「諸王の行状」として始める(1頁)、という形式を採っている。本書の日本語の題名については、例えば、『ニザーム・アルムルクの「諸王の行状」』、といった形で統一することはできないであろうか。

本書のペルシア語テキストについて

Siyar al-mulūk のテキストに関しては、例えば、20世紀前半イランを代表する大詩人、学者、政治家であったバハールがペルシア語の優れた形態論として知られる *Sabk-shināsī* の中で、*Siyar al-mulūk* について、元来は54章あったものが50章で現在に伝えられており、元来の姿からはかけ離れてしまったとしている (*Sabk-shināsī*, vol. II. 1958. p. 95) など、情報は錯綜していたが、1960年代に、現時点で最も古い写本として「ナフジャワーニー寄贈写本」が発見されて以来これが学術的価値ある写本として定着しているといえる。本書の翻訳にあたって、訳者たちは、このナフジャワーニー写本を底本としつつ、ナフジャワーニー写本の11葉の欠落部分を補完すべく、トルコの研究者キョイメンの校訂本を参照しつつ訳業にあたったとしている (本訳書 362-364頁)。本訳書の底本とされたダークの校訂本については、1968年にダークが世に問うた校訂本 *Siyar al-mulūk* が出版後に多くの間違いが発見されたため、これを修正した版として1976年版が出版されたが、1968年版の間違いを、印刷された活字の上からそのまま被せて修正するという不自然な状態のテキストになっている部分が多々あり、若干判別しにくい状態となっている (例えば、本書 21 頁 9 行目、162 頁 8 行目、185 頁 5 行目、215 頁・下から 9 行目——一つの単語の間が空いている、226 頁 22 節冒頭——旧版にあった接続詞を削除したまま空間ができて、247 頁・下から 11 行目——単語の活字が不鮮明、及び、下から 7 行目——*chūn* に続く文の切れ目のコンマがない、など多数)。

1976年版でも疑問が残る箇所として、258 頁 10 行目の *gardānīdandī*, *āwardandī* は、文脈からして、それぞれ、三人称単数形 *gardānīdī*, *āwardī* ではないか、あるいは、316 頁・下から 5 行目は、*natawān* ではなく *natawānand* ではないであろうか、など疑問が残る箇所が散見される。また、190 頁・下から 3 行目 *marḥūm* という語については、意味上は必要ないかと思われるが、校訂者自身が写本に乱れがみられるとしつつ判断を留保している箇所 (本書 340 頁・注釈の部分) がそのまま刊行されている。もとより、これは評者の個人的な推察に過ぎないが、こうした箇所については、なんらかのコメントがあってもよいかと思われた。

また、ニザーム・アルムルクの『諸王の行状』中に見られるアラビア語の伝承の真偽についても (本書 219-221 頁) 慎重に考証する必要があるとあり、マリクシャー宮廷の取り巻きの法学者たちの学識の水準を検証する必要があるようにも思われる。

本書の文学史的位置づけに関連して

文学史的側面で本書の特徴は、同義語を重複させる技法などがなく、極力分かりやすい簡単な文章が心がけられている点であるとされる。バハールは、これは時の王マリクシャーが活用するために書かれたものであるという側面が大きいとしている。本書の文章が簡潔に複雑な経緯、伏線を理解させるという点で優れた文体であるとして例として、バハールは以下の箇所を挙げている。 (*Sabk-shināsī*, vol. II. 96-97.)

夜になると、カワードはこの間の経緯を全てヌーシールヴァーンに話した。ヌーシールヴァーンは言った。「一週間過ぎましたら王はマズダクを呼び、彼にこう言ってください。「昨夜ヌーシールヴァーンは恐ろしい夢を見たらしい。今朝早く私のところへ来てこんな風に言った。『私はこんなことを夢見ました。大きな炎が私の命を狙い、私は逃げ回っていました。すると美しい顔をした人物が私の前に現れました。私は彼にこう言いました。「この炎は私をどうしようとしているのだろうか」。彼は言いました。「あなたが炎を嘘つき呼ばわりしたので、怒っているのだ」。私は言いました。「あなたは どうしてそれを知っているのか」。彼は言いました。「天使は全てを知っているのだ」。私は夢から覚めました。今から拝火殿に行こうと思います」。そう言ってヌーシールヴァーンはいま、炎にくべて三日三晩炎を拝み神をあがめるに足るほどの量の麝香、沈香、龍涎香を運んでいるところだ」と。カワードはその通りに伝え、一方ヌーシールヴァーンもその通りに行動した。マズダクは大いに喜んだ。(本訳書 21 節・257-258 頁)

この部分は宿敵マズダクを欺くためのヌーシールヴァーンとカワードの奸計がまさに目に見たようにたくみに伝えられているとされる文章である。

それからヌーフは父に言った。「馬にお乗りください。二人揃ってスィパーフサーラルの屋敷に行きましょう。飼い葉袋も持っていきます。そしてあなたは軍の指揮官たちの前で退位することにした[と
言い]、私を後継者に指名してください。私が彼らに応え、帝王権が我らの家系に留まるようにします。
軍の方ももはやあなたとはやっていけないでしょうから。そうしてあなたは余生を全うすることが
できるでしょう」。(本訳書 276-277 頁)

バハールは、これは、この時点で軍がヌーフ・ブン・ナスル王から心理的に離反している実態があり、そうした現状が既に修復し難いことを伝えているとしている。本書は、これに類した簡潔で達意の文章によって構成されているというのがバハールの評価である。

本書の構成と内容に関連して

本書の構成は、目次に続いて、ニザーム・アルムルク暗殺(1092年)の後にこの書をまとめた人物による以下の言葉から理解される。

ニザーム・アルムルク——(中略)——は最初この書を、とりあえず三九の章からなる簡略版として書き、[スルタンに] 献呈した。——(中略)——彼の心中に常にあったこの王権への敵対者に対する懊悩のゆえに、⁽¹¹⁾ 一の章を追加し、また各章にふさわしい内容を追加した。そして[旅に] 出発するときに一人の者にそれを託した。バグダードへの途上、彼に例の事件が起きた。パーティン派が現れ人々に害を与えていたので、託された者はこの書を、世界の主——(中略)——の永続によって、公正と正義とイスラームとが力を増したこの時まで公にすることができなかった。」(本訳書 6 頁。ルビは筆者)

ここには、マリクシャーたる世界の主の永続によって、「公正と正義が力を増したとき」とあり、「公正なる王による統治」への強い希求が本書全体に貫流していることがわかる。ニザーム・アルムルクのこうした「王の公正さ」への思いは、本書執筆における「客観的記述」の確保という点にも現れているといえる。例えば、古来、ペルシアの王たちは諜報官や密偵を任命する方法をとったが、「セルジューク家だけはこのことを心がけてこなかった。*Āl-i Saljūk ki dīl dar īn ma'nī na-baste-and.*」(95 頁 17 節、本訳書 10 章 17 節)といったセルジューク朝のスルタンを敢えて遠巻きに批判的に記述するような箇所も本書中に見受けられる。

この文章によれば、本書は、第一部(1 章から 39 章)と第二部(40 章から 50 章)からなり、第一部は、主として国家管理に関わる具体的な事項が逐条的に列挙、解説され、第二部は、パーティン派の台頭、マズダク、ホッラマ・ディーンの一団の行動とバーバクの反乱、スィーンバードの反乱とササーン朝のヌーシールヴァーンの対応の経緯など、逸脱的傾向を示す宗教・政治運動に関わる記述が大半を占める。

本訳書の解説の部分で紹介される学説によれば、第二部を構成する 40 章以降は、36 章までの第二の補遺として、40 章から 50 章が「暫定的に配置された」(本訳書 368 頁)可能性があるという。一方で、本書の第二部における宗教運動の記述が文化史的に実に大きな意味合いをもっていることもまた知られている。イスマイル派の重要性はもちろんであるが、例えば、ホッラマ・ディーンに関しても、すべての預言者は宗教上の相違があってもすべて「一つの精神」を共有し、啓示は途切れることなく継続する、とする教義と、ムフィッディーン・イブン・アラビー(d. 1240)との類似性を指摘する向きもあり(*Abū Naṣr Muṭahhar bin Maqdisī, Āfarīnash wa Tārīkh, tarjma-yi fārsī-yi Kitāb al-Bad' wa al-Tārīkh, 1374/1995, vol. I-III. 89-90, vol. IV-VI, 575-576.*)、ニザーム・アルムルクが第二部で敢えて扱った宗教にかかわる事項にかかわる記述が有する意味合いを考慮する必要もあろう。いわばニザーム・アルムルクの歴史意識が表出しているともいえるのが第二部であろう。

第二部に関していえば、特に、パーティン派はもとより、*bad-madhab*、*bad-kīsh*、*bad-i'tiqād*、*bid'at*、*hawā wa bid'at*、*mubtadi'* などの宗教信条や信仰の逸脱的傾向を示すと思われる述語・用語が多々登場するが(ほとんどが「異端」、「異教」として訳出されているようである)、それぞれの言葉が指し示す内容を整理する必要があるように思われた。「Zandaqa」が、ヒジュラ暦一世紀から四世紀の間で意味する内容が変化し

ているという実態があり、本書に登場する宗教関連の言葉にもそうした状況が当てはまる可能性がある。

以下に、翻訳上、若干気になった点だけ挙げる(以下はもとより評者の個人的な視点に基づく言及である。冒頭にページ数と節番号が段落を挙げる)。

2頁——厳密には、*īzād t'ālā* は、「至高なる神」ではなく、「神——至高であられる——」であるので初出の際に「至高なる神」と標記することを指摘して置く必要はないか。

6頁・第2段落——ここはこの本をとりまとめた人物の言葉で重要な箇所であるので慎重さが問われる。「とりあえず39の章からなる簡略版として書き、献呈した。」とあるが、本書の簡略版の存在が確認されている印象を与えるので、「思いついたことをそのまま簡略に書き留めて献呈した」くらいの方が原文に近いのではないか。

26頁4節——「ちゃんとした方法で」という表現は不正確であるので、例えば「それなりに」あるいは「自分なりに」とすべきであろう。

110頁5行目——「別の方法」とあるが、伝達方法については「口頭で」と記されているので、ここでは *dīgar rāh* は、確認のため、「再度」「もう一度」、という意味ととるべきでなかろうか。

176頁3行目——「一般市民 *āzād-mard-i*」は、古典期では「*āzād-mard*」が *najīb*「高貴な、気高い」の意味で用いられる場合があることから、文脈からして、ここも「醗酵しているとはいえ品性気高い人物」という意味で解するべきか。97頁6節では *āzād-mard* は「立派な方」となっている。

180頁2節——「……、信仰の友、圧政の敵となり、……」とあるが、原文は、「*dīn dūst wa sitam dushman bāshad*」となっており、「となり」とすると「帝王は以前はそうではなかった」ということが含意され得るので、「……、信仰の友、圧政の敵である帝王が信仰を援け……」といった形にした方が文意に近いように思われた。

202頁・第1段落——*ranjūr-dil*「腹を立てる」と訳出されているが(これに類した単語は本書では多々でてくる)、「不愉快に思う」程度で若干ニュアンスが違う印象をもった。

203頁3段落目冒頭——「宗派、信仰を同じくして」とあるが、原文は、*ū ham-madhab wa ham-i'tiqād-i ū būdī* となっており、誰と信仰を同じくするのかが不明であるので、この最後の人称代名詞を「雇い入れる人」と考えて、これを() 付きで入れておいても良いかと思われる。

204頁・冒頭の段落——「トルコ人たちは気にしない」はトルコ人の「意思」が現れた形だが、原文は *shāyad* のみであるので、「問題ない、おかしいことではない」という方が適切ではないか。

228頁43節冒頭——「病んだ時代が過ぎゆき、よき時代が到来する」とあるが、ここにいう「病んだ時代 *zamāna-yi bīmār*」とは本書執筆に際してのニザーム・アルムルクの歴史意識を反映する重要なキーワードとして注意する必要がある。原文は、「良き時代が到来し、病んだ時代が転換するとき、その印は……」となっており、現代的な論理では本訳書の訳文で理解できるが、この重要な文章の順番を取って変えて訳出する理由が判明しない。

295頁・第2段落末——「軍は出陣し、ムハンマラの一团を追い散らした」とあり、前ページの記述からバーティン派はグルガン地方では「ムハンマラ(赤い集団)」と呼ばれたことがわかる。一方で、この一团

in jam' は、「ホッラマ・ディーン」を指すことは明らかであることから、原文にない「ムハンマラの」を訳出するに際して敢えて加える必要があるかが疑問で、むしろ、「バーティーン派およびホッラマ・ディーンの一団」とした方が読者にはわかりやすいのではないか。

296 頁・第 2 段落冒頭——「(……反乱を起こした) ホッラマ・ディーンの者たちは彼に合流しようとしたが」のここでの「彼」がバーバクであるとする、その「彼」に合流したのは「ホッラマ・ディーン」でなく、「バーティーン派」であるとは考えられないであろうか？

297 頁 4 節の末——「その数は五〇〇〇、一万、二万と増えていき」は、「一万が二万五千へと増えていき」とするのが自然ではないか。

(藤井守男 東京外国語大学総合国際学研究院教授)

**馬場多聞『宮廷食材・ネットワーク・王権——イエメン・ラスール朝と一三世紀の世界』九州大学出版会
2017 年 x+326 頁**

ラスール朝(1229～1454 年)はイスラーム以後のイエメンの歴史において最も有名な王朝であろう。インドと地中海を結ぶ交易路の要衝に位置したことから、海域に注目した研究でもよく取り上げられており、日本では家島彦一、栗山保之による一連の研究が知られている。

本書は管見の限り日本で最初に出版されたラスール朝に関する単著である(未出版のものでは、ラスール朝年代記に関する家島の博士論文が存在する)。とすれば、読者の中には海上勢力としてのラスール朝の歴史が詳細に記述されていたり、現在流行している「全体史」の中にラスール朝を位置づけられていたりすることを期待する人がいるかもしれない。

本書はそのようなアプローチはとっていない。議論の中で注目するのは宮廷食材の入手、利用、分配であり、それにまつわる地域内のネットワークと王権のかかわりである。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第 1 部——食材・料理・宴席

第 1 章 食材

第 2 章 料理・宴席

第 2 部——地域内ネットワーク

第 3 章 宮廷への食材供給元

第 4 章 地理認識

第 3 部——王権

第 5 章 宮廷組織と食材分配

第 6 章 家内奴隷

結論

第 1 部、第 2 部、第 3 部のタイトルは、おおむね本書の書名に対応している。

序章において著者は、13 世紀をイスラーム世界における世界帝国(アッバース朝、オスマン朝)の狭間にある時期だと位置づける(後述の通り、本書の最後にもこの考えは繰り返される)。同時に、当時は「13 世紀世界システム」とも言えるような多地域間のつながりが見られた時代でもあったこと、ラスール朝は「インド洋海域世界」の重要な一角を占めていたことを、アブー・ルゴドや家島彦一の研究を参照しながら述べる。しかし本書はこのようなシステムを構成していた諸要素のひとつとしてラスール朝を扱うことをあえて